

伝統民家の保存修理

空間計画研究所
喜多順三

伝統民家の保存修理事例として、三好市東祖谷落合集落の中尾家隠居屋、吉岡家主屋を紹介する。いずれも空き家だったものを三好市が長期間無償で借り上げ、宿泊施設に改築し、地域観光の拠点施設とするものである。伝建地区内の特定物件であるため、外観は保存計画に基づいた復原を行い、内部は祖谷の民家の特性を生かしながら、宿泊施設にふさわしい快適性を確保することが求められた。

1 中尾家隠居屋

落合集落の最高部に南面して建つ民家で、明治期の建築と推定されている。昭和30年頃、サスを取り外し、棟を下げて和小屋を組みトタン屋根を葺く「小屋下げ」が行われているが、横二間取の内部の改造は少なく、また、正面と東側には前便所が、また背面部や側面にはヒシャギ竹仕上げが見られるなど、全体的に伝統的な形式をよく残していた。しかし、長く空き屋だったこともあり、背面や側面の柱は足元が腐朽し、また土壁も剥落するなど、建物の損傷は著しかった。

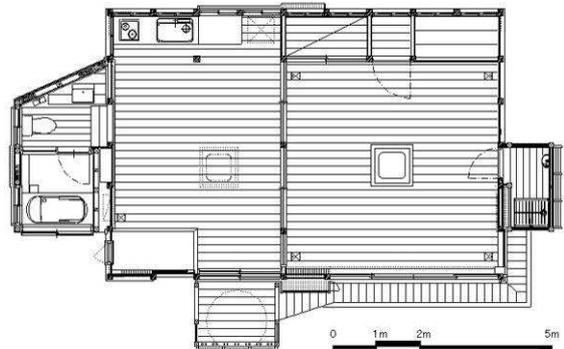
調査の結果、上屋梁からサスの痕跡が見つかり、屋根は上屋部分が茅葺きで、周囲に下屋が回る祖谷地方では比較的珍しい形態であることが明らかになった。サスの構造は束踏に棟束の痕跡がないことから棟束を有さない形式とし、下屋部分の仕上げは古い写真を参考に杉皮葺きとした。内部は当初の姿の復原を基本としたが、下屋部分には垂れ壁と天井を設け、断熱材を施した。また、床下と外周壁の内側にも断熱材を設け、外部建具は雨戸+ペアガラス入りの框戸+障子と三重にするなど、気密性と断熱性の向上を図った。

前便所は2カ所とも形態を復原し、それぞれ展望コーナーと洗濯室にした。浴室とトイレは差し掛けのあった部分に増築したが、アプローチ側からは見えないよう半間後退し、屋根・外壁はマーキングの原則に則り、金属板葺き、杉板張りとしている。

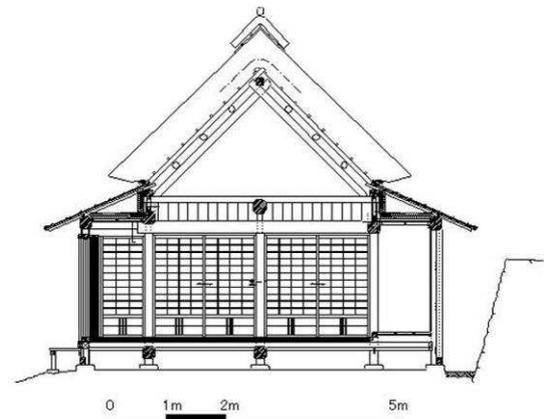
北海道並に冷え込むといわれる冬季の対策とし



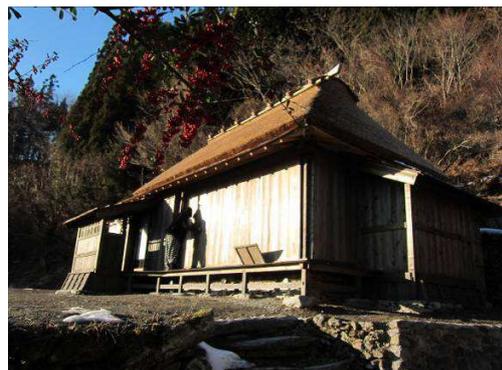
中尾家 修理前外観



中尾家 平面図(修理後)



中尾家 矩計図(修理後)



中尾家 修理後外観

て、先述の高気密・高断熱化のほか、居室には床暖房とガスファンヒーターを、水回りには凍害防止のためのオイルヒーターを設置した。

耐震性能については、限界耐力計算により確認した。安全限界は X 方向が 1/17rad、Y 方向が 1/35rad となっている。

2 吉岡家主屋

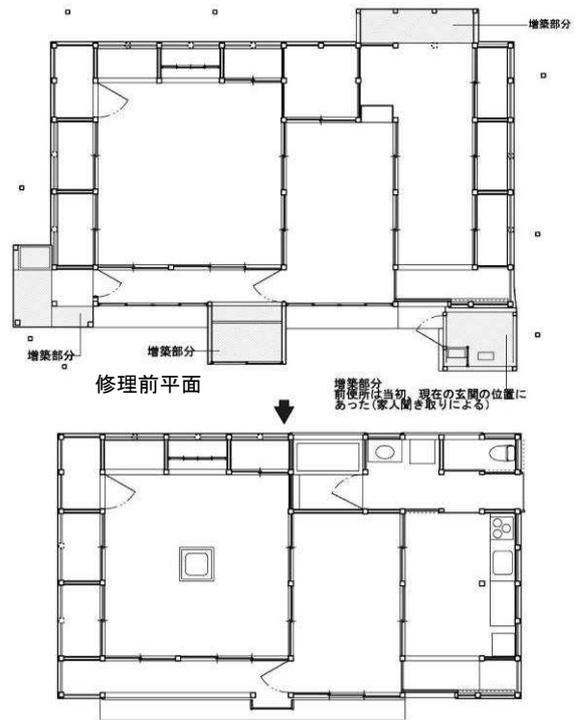
外観は、屋根の小屋下げや前便所の位置変更、玄関や上手の正面側に浴室が設けられるなど、当初から大きく変化しているが、中ネマ三間取の内部は改造が少ない。建設時期は不明であるが、「ヌキダチ」と呼ばれる軸部を貫と長押で固める構法、オモテの5尺間（2.5間を3分割して柱。梁を配置）、上手妻側の上屋柱が2本あることなど、祖谷地方の古い民家で確認されている特徴が多く見られる。元禄12年(1699)年の建築である重要文化財木村家住宅とも共通点が多い。

上屋梁にはサスの、東踏には棟束の痕跡が残り、小屋組は棟束で棟木を支え、サスを受ける構法であることが確認できた。内部はオモテやナカノマは当初の姿の復原を基本とし、ネマや下手の裏側に浴室等の水回りを設けた。外観は当初の姿に戻すこととして、屋根は茅葺き、外壁は大壁の土壁の上にヒシヤギ竹張りとした。現存する外便所は後の時代に建築されたものであり、当初とは場所も異なること、外便所につながる外縁が、出入口を横断し、建物の機能的に障害があることから、撤去した。

冬季の対策としては、中尾家同様、断熱性・気密性の向上、床暖房等の暖房設備の設置を行っている。耐震性能は、限界耐力計算により確認、安全限界は X 方向・Y 方向とも 1/23rad であった。



吉岡家 修理前外観



吉岡家主屋平面図



吉岡家 修理後外観



吉岡家主屋内観